

受講番号 19088 学校名 高岡中学校 氏名 高石 千香

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 3年生 生徒数 20名
科目名 3年生 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 New Horizon English Course III

クラスの様子・特徴

全体的に意欲的に取り組める生徒が多い。ほぼ毎時間ペアで活動を実施しているため、友達同士で「話すこと」には比較的抵抗感は少なくなっているが、定期テスト等においても得点の差が非常に大きく、まだまだ英語に対して苦手意識を持っている生徒も多い。

問題の確定

英語に対する苦手意識を取り除くために、ペアまたはグループ活動による関わり合いを持たせる言語活動を組み入れて指導していく。

予備調査

A 授業の観察	B 生徒による授業評価	C 学力データ
習熟度別(E2は中間クラス)で授業を行っているが、英語に対して苦手意識を持っている生徒が多い。また定期テスト等においても得点の差が非常に大きい。	アンケート結果によると、コース制の授業は発表回数が多く、一人ひとりにあったスピードで学習できるため、自分にあっていると感じている生徒がほとんどである。また、分からないところを質問できるため、授業が分かる、おもしろいと答えている。	CRTの結果(学年全体)によると、聞くこと(71.0%)話すこと(67.3%)読むこと(58.7%)書くこと(50.2%)である。聞くことはほぼ全国得点率と同じであるが他の3領域が弱い。

リサーチ・クエスト

生徒が意欲的に表現活動に参加する、ペア活動やグループ活動をどのように工夫すればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1	⇒	実践1	⇒	検証1
英語に対して苦手意識を持っている生徒には、授業中の雰囲気を変えていくことで、苦手意識を取り除くことができるのではないかと考えた。また授業の中で安心感・満足感を感じることができれば、学習意欲を喚起することができるだろう。		①今月の歌を授業の最初に流して雰囲気作りをした。だんだんと慣れてくると、既習語句や文法事項が含まれている部分をブランクにして穴埋めを行った。②ペアによるワードゲームを活用して、既習語句や表現の口頭練習を行い、文レベルでの会話を行うための準備段階としての練習を行う。③安心できる学習集団をめざしてペア活動やグループ活動を取り入れていく。		生徒は英語の歌が大好きである。毎月どんな歌になるか楽しみにしているが、ディクテーションとなると負担を感じた生徒もいた。③で行ったInterview Gameでは、講座の友だちを知り、誰とでも話せる雰囲気ができてきたと思われる。また、互いに確認することで既習事項の表現を使用する機会を持ち、定期的に実施するインタビューテスト等につなげていくことができた。
仮説2	⇒	実践2	⇒	検証2
生徒同士の関わり合いを持たせる学習課題を多く設定すれば、意欲的に授業に参加できるようになるだろう。		ゲームを通して、単語のスプリングや発音の定着をめざした。音読時は制限時間内に何回読めるかをパートナーが確認し、評価カードにサインをした。次に別の列の生徒と活動した。音読練習に、じゃんけん読み、対話読み、シャドーイングを取り入れ、同じ流れにならないように留意した。基本構文の定着をめざし、既習のターゲットセンテンスを次の時間にテストした。教科リーダーに活躍の場を設定した。		基本的な単語に取り組んだビンゴゲームやクロスワードゲームは、英語が苦手な生徒も意欲的に集中して取り組み、英語が読めたという自信につながったようであった。定期的に、これらのゲームを単語テストなどに活用すれば、生徒の意欲も継続していくかも知れないと感じた。音読に関してはペアと練習する時に生徒は最も意欲的に取り組めた。音読時、声が小さい時は、練習が不十分で生徒に自信がないときであった。
仮説3	⇒	実践3	⇒	検証3
特定のペアやグループにならない状況を教師側が意図的に作り出すことは、生徒一人ひとりの、自分を表現できる場を増やす事につながるのではないかと考えた。また生徒による相互評価の場を設定することで、生徒自身の学習意欲を喚起することにつながるのではないかと考えた。		発表回数チェック表を活用した。まずはペアの相手と活動を行い、うまく表現できたら互いにステッカーを相手に渡した。時間内に他のパートナーを探して教師の所に二人でステッカーをもらいに行き、欠席者がいた場合は前の席に移動するという新ルールを作った。2人目以降は新しい相手を探さなければならないため、自然に自分を出せる機会になったと思われる。授業において、活動から活動への無駄のない場面転換になるよう心がけた。		生徒同士が相互評価を行ったことや、評価者が特定ではなかったため、最初は戸惑う姿も見られた。しかし英語を使わなければならない状況を作り出したことにより、「英語を使った」「英語が話せた」という自信につながり、表現活動に積極的に参加する姿を多く目にするようになった。しかし、英語で「自分を表現できる」という対処にまでは至っていない。

研究の成果

仮説1～3を実践することにより、生徒はペア(グループ)活動に積極的に参加し、授業が楽しくなったとアンケートで回答している。「生徒が自らやってみよう」と感じ、意欲的に授業に参加できるようになるためには、教師側が到達目標を明確にした学習過程を生徒に示していかなければならない。また授業における目標設定、明確な指示・支援、そして英語を使いたくなる、また英語を使わなければならない状況や場面を設定することや学習過程、さらに評価のあり方を常に考えていく必要があると思う。このリサーチで行ってきた検証をもとに、今後も、地道なそして徹底した指導を続けていきたい。

今後の授業改善の課題

「授業を楽しく受けたい」「授業が分かりたい」という思いは全ての生徒が持っている。今後も授業評価シートによる生徒の生の声を真摯に受け止め、授業評価をシステム化し、充実した授業になるよう研究を続けていきたい。さらに、本校は家庭学習がほぼ定着しているため、授業内容と関連した家庭学習課題を出し、授業やテストで生徒が「役に立った」と思える家庭学習のあり方と評価の仕方についての研究も継続していきたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

(088)852-2136